

## もの言う牧師のエッセー 第61話

## 「清盛残念」

NHK大河ドラマ「平清盛」の平均視聴率が、大河至上最低の12%で終わった。しかしながら、昨年は“大河50周年”という記念すべき年であり、それだけに視聴率を手軽に稼げる“戦国もの”や幕末ではなく、あえて“レアな平安時代”を描くという、NHKにとっては挑戦的なものであったはずである。日本史上きっての悪役である平清盛を軸に据え、綿密な宮中行事の描写や、専門家らを動員しての衣装や台詞などの時代考証には目を見張ったし、古典芸能を伝承する歌舞伎俳優などからは絶賛されもした。

また、清盛の父忠盛の貧乏暮らしや、泥にまみれ田植えをしながらのし上った北条氏ら東国武士の様子は日本史の根幹に関わる「武家社会成立」を完璧なまでに描いていた。さらに驚くべきは平安時代の“庶民”を描いていたことである。実は日本は鎌倉以前の庶民の生活を知らない。資料が全くないからである。あるのは公家や宮家の“雅な”記録だけであり、言わば“貴族以外は人でない”という暗い時代を、これまたリアルに描き出していた。

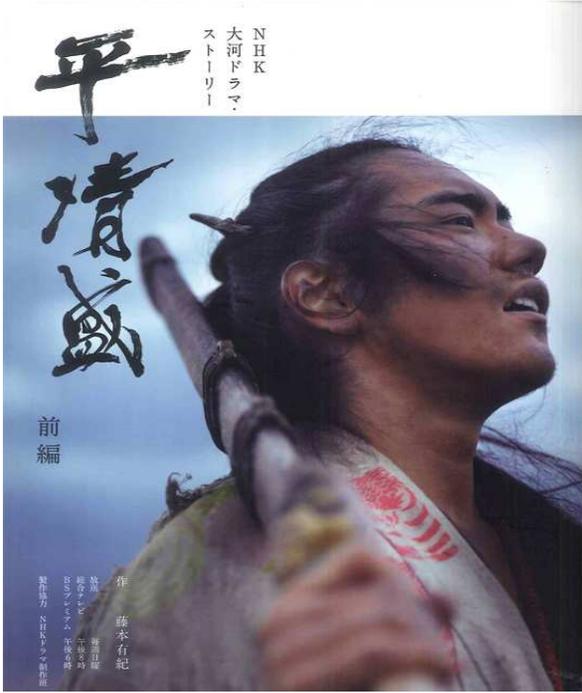
が、結果は周知の通り、「画面が汚い」とか「人間関係が複雑で難解」と酷評され、不人気ばかりが目立ち、制作スタッフ側は人気俳優の投入や、異例とも言える、放送と同時進行でツイッター解説を実施するなどしたが、全く焼け石に水であった。これは日本人が現実よりも、アニメの様なファンタジーを求める傾向があることを示してはなかろうか。聖書には

「私は真理である。」と述べたイエスが、

「私（イエス）は自分がどこから来てどこへ行くか、ちゃんと分かっている。

ところがあなたがたは、全然分かってない。」ヨハネの福音書8章14節：LB

と、物分りの悪い人々に声を荒げたことが記されている。思えば原発事故やトンネルの崩落、どうしようもない国の借金などは、現実を直視しない結果であった。現実を直視することは、時として勇気のいることであり、そこにあるのは不条理や空しさだけかも知れない。しかし神が人類に示したゴスペルは、「死後の裁き」など、直視するのに勇気を必要とするも、キリストによる“リアルな”罪の赦しと救いの希望に溢れたものだ。今、日本人が神を信じ、残念なことにならぬことを祈る。



NHK  
大河ドラマ  
ストーリー

# 平清盛

前編

作 藤本有紀  
監 渡辺 雄三  
演出 アベ 伸  
BSプレミアム 土曜5時  
制作協力 NHKエンタープライズ